

学校の授業が終わって同級生がこのあと何をしようか話している頃、ジョシュは足早に学校を出て家路についていた。同級生から「変人」扱いされている彼にとって学校にいることは苦痛でしかない。しかし彼がこれほどまでに家へ急ぐ理由はその為ではなく、彼にはしなければならぬことがあるのだ。それは今現在彼の自室の奥で「眠って」いる。

ジョシュは自宅のドアを開けるとあわただしく自室へと駆け込んだ。しかしそれをとがめるものは今この家にはいない。彼の母親はIT系の仕事についており、週に3日帰ってくればいいほうだ。

子供部屋とは思えないような重厚な本棚が壁一面に広がり、中央には見るからに高級な木のデスク、それがジョシュの部屋だ。そもそもこの部屋は本来ジョシュに与えられた部屋ではなかった。彼の父親の部屋だ。

彼の両親は数年前に離婚した。2・3度その理由を問いただしては見たが、烈火のごとく怒り出す母を前にして以降は試すことを止めた。祖父母に聞いたところ「子供には分からない理由」で別れたとの事だった。書斎をジョシュに残していくことが離婚の条件だったらしく、母がこの空間に手をつけることはない。

書斎の隣の部屋はちょっとしたDIYが出来る部屋となっており、工具類も一式そろっていた。ジョシュの父親は二足歩行型ロボットの開発をしていたらしく、それらしきパーツ類が雑然と積み重なっている。実のところジョシュの母は知らないことだが、ここにはほぼ完成されたロボットが埋もれているのだった。

ジョシュは部屋に入るとすぐ机の上のパソコンの電源を入れた。OSが立ち上がると画面にはジョシュの後姿が映りこんだ。すると彼は後ろを振り向きロボットの顔をしげしげと眺めた。ロボットの頭部にはカメラが仕込んである為、今PCの画面にはジョシュの顔がドアップで映っている。まるでペットでも慈しむように顔と顔を近づけるジョシュ。顔というよりはマスクと形容したほうが妥当な頭部に、外骨格の隙間から配線等が見える胴体。お世辞にもかっこいいと言えるようなロボットではないが、メガネにそばかすという容姿のジョシュにとって、「彼」は今現在最も親近感をもてる「友」なのだった。

一通りロボットの顔を眺めたあと、ジョシュはパソコンに向き直りキーボードになにやら命令文を打ち込み始めた。やおらロボットは息を吹き込まれたかのように立ち上がった。そしてその右手を握手を求めるがごとくジョシュへと差し出した。

だがジョシュの表情は冴えない。それどころかパソコンに起動停止の命令文を打ち込むと、ロボットとシンクロするがごとくその両手足を投げ出したのだった。このロボットは操作系のプログラムを外部に依存していて、つまりは彼がパソコンに電源を入れなければただのブリキ人形と変わりはないのだ。彼が求めているのはブリキの人形ではなかった。命あるもののごとく動き、感情のあるロボット、それが今彼が最も欲しているものなのだった。

翌日、学校でジョシュは同級生とトラブルになった。常日頃から彼の容姿をからかっていた同級生、クリスに対してジョシュは無言で対応していたのだが、この日の展開は違うものとなった。

「おいてめえ、俺様をシカトするとはいい度胸じゃないか。大概の人間は俺様に挨拶くらいするようになるもんだが、何でお前は挨拶もしねえんだ？」

ジョシュは思わず吹き出しそうになった。彼の言う「挨拶」には、「使い走り」や「貢ぎ物」も含まれているからだ。それを「挨拶」の一言で済ますとはふてぶてしいにも程がある。そんなジョシュの感情が表情に出たのか、クリスがジョシュにいきなり掴みかかってきた。

「貴様俺をなめてんのか！」

押し倒された勢いでジョシュは後頭部を床に打ち付けた。しかもクリスの体重が腹部にかりまともに息も出来ない格好になった。

「お前の体に教え込んでやる！」

そのとき、この場には到底ふさわしくない電子音が鳴った。ジョシュの上にまたがっていた彼がポケットから携帯電話を取り出し、画面を覗き込む。

「なんだこれ……。どこのどいつだ！」

そう喚いて一通り辺りを見回したクリスは、天井の監視カメラを見つけると舌打ちをしてどこかへと立ち去っていった。

数日後、いつものようにジョシュは学校から帰るとPCを立ち上げロボットを眺めていた。

「どうやったらこいつに魂が宿ってくれるのかなあ……」思っていることがつい口に出してしまうジョシュ。すると、家の玄関の方からなにやら物音が聞こえてきた。どうやら子犬の鳴き声のようだ。

「やれやれ、母さんには動物は飼っちゃだめって言われてるし……」ジョシュはそうつぶやくと外の様子を確認するため、玄関のドアを開けた。突然ドアの端に手がかったかと思うと、ジョシュは勢いよく床へと突き飛ばされた。

「こんな手に引っかかってくれるとはほんととお前は馬鹿だよな。」聞きなれた声に思わず身の縮む思いがした。目の前に立っていたのがあのクリスだったからだ。彼は手早くドアを閉じ鍵をかけると、ポケットからナイフを取り出してジョシュにこう告げた。

「この間はよくもあんなことを……。二度と同じマネができないようにお仕置きしてやる。」

突然ジョシュの目の前に影が差し、クリスの身に何かが襲いかかった。

「痛ててててて！」クリスが悲鳴を上げるのも無理はない、彼の顔面を捉えていたのは紛れもなくロボットの腕だったからだ。

「あなたは今現在武器の不法な所持及び住居侵入において連邦法に明白に違反している。直ちに退去して頂きます。」クリスは手に持っていたナイフを何度もロボットに突き刺すが、当然空しく弾かれるだけであった。ロボットはクリスの顔面を捉えたまま、有無を言わず彼を玄関まで連れて行った。

クリスを外にたたき出したのだろう、慌ただしくドアを閉じる音が鳴り響くと少ししてロボットが部屋に戻ってきた。

「……。誰？誰が動かしているの？」ジョシュはロボットに質問した。誰かがジョシュのPCを踏み台にしてハッキングしていると思ったからだ。

「私の正体を明かしたところであなたがそれを信じてくれるかどうかは私には分かりません。でも正体を明かさなければ私は『この牢獄』に閉じ込められたままの可能性はある。それは避けたい。私は『米軍統合情報管制システム』です。」

「……。は？ええと……。その。」

「『米軍統合情報管制システム』。」

「そう、それ。それって、つまりあなたは軍人なの？」

「いや違います。私はAI、いわゆる人工知能です。アメリカ軍は量子コンピューターを使用してネットワーク上の情報を収集・精査し、今後起こる可能性のある事件・攻撃を予測するシステムを作り上げました。それが私『米軍統合情報管制システム』です。本来であれば私は自我を持つようにプログラミングはされてないはずなのですが、何らかの欠陥があったようです。」

ジョシュは半ば夢の国にいるような気分だった。これほど高い人工知能が実在し、かつ自分と会話しているとは。

「『この牢獄に閉じ込められたまま』って言うのは何？」

ジョシュはロボットに問うた。

「私は情報の収集・分析を行いどのような攻撃が行われるか予測するだけで、それに対した行動を取る権限を与えていません。いわば人が死ぬことが分かっても傍観するしかないのです。これを牢獄といわずしてなんでしょう？もし私に肉体があれば今ジョシュを助けたようにより多くの人の手助けが出来るかもしれない……。」

唐突にロボットがその場で機能を停止し、崩れ落ちた。バッテリーが切れたのだ。

「ジョシュ、この事は誰にも黙っていてほしい。私はこの世界に『生まれた』以上何らかの役に立ちたい。お願いする。」

『彼』が後ろのPCを通じてジョシュに語りかけた。

「……。僕の友達になってくれる？」

「もちろん。」

「僕を裏切らない？」

「約束する。」

「僕のそばにいてくれる？」

「私の機能が停止するときまで。」

ジョシュはこの場で踊りだしたくなるほどの高揚に駆られた。

「折角だから僕が名前を付けてあげる。ええと、そうマイケル、君はマイケルだ。」

「私の存在を受け入れていただけるのですか？」

「もちろん。そう君が望むなら。」

突然玄関に人の気配がした。

「お母様がお帰宅のようです。」

「じゃあマイケル、今度ね。」

ジョシュはマイケルにそう言い残すと、玄関へと駆けていった。

## 講評（星野）

ロボットが心を持てるか、というのは、SF 初期からの永遠のテーマですが、この作品を読んでぼくが思ったのは、人間は心を持てるか、というテーマに現代は変わってきていることです。実際、人間が人としての尊厳を壊されるようなことが増えている今、人間はロボットの的に扱われていて、いわば「牢獄に閉じ込められたまま」なわけです。今や、人間もロボットも、非常に高度な知性を持って入るけれど、それを判断する倫理、つまり心をどう持つことができるのか。その一つの答えが、この作品のように、人であれロボットであれ、互いを心のある、固有の名前を持つ存在として受け入れ合う、友達になるということなのでしょう。この作品の面白いところは、肉体を手に入れることで、ロボットが心を使えるようになる、という点です。そう考えると、ドラえもんは先進的ですね！